

よれば再びソ連領に連行されて抑留されたということであった。

昭和二十二年二月頃、元山に集合させられて船に乗せられ移動を始めたが、最初はどこへ行くのか全く分からず、またシベリアでも連行されると思っっている間に船は佐世保に到着していた。この船は栄豊丸であったことは後から分かった。

夢にまで見た日本に生きて帰れることができた。抑留期間中に死ぬかと思っただことが幾度かあった。ある時、もうだめだ、死ぬかもしれないような状態になった時、昭和十七年一月日本を出て満州の新京に赴任するとき母が渡してくれた新勝山成田神宮のお守りを肌身離さず持っていたが、この成田山のお守りの木札を取り出して切り崩して数回に分けて飲んだところ、死期を退けることができた。お札を持たせてくれた母の力と成田山のご加護で助かり日本に帰れたのは、言葉、文章等では表現できない喜びであった。

## 抑留記

愛知県 内藤 朝夫

### 一、出生から入隊

①大正十(一九二一)年一月十九日、朝鮮光州市にて出生。

昭和十三(一九三八)年三月、木浦(モッポ)商業高校を卒業、同年四月南鮮電力(郡山)に勤務。家族は父母と妹だった。

②昭和十七年七月十六日、静岡県浜松航空隊に現役入営、通信班に配属。当時、装備は良好と思われた。

### 二、ソ連軍侵攻前

①昭和十八年二月、当航空隊通信連隊は、中支方面の南京、漢口、徐州各地を転戦する。空中勤務者には特攻任務も課せられた。行き先は特攻基地知覧ではなかったかと思う。

② 出撃前夜の送別会で、青年将校の振舞いは悲壯なもので、宴会の真つ最中、軍刀を抜き大声で詩吟を怒鳴り、乱舞し料亭の柱に傷をつける等、まるで氣違いのようであった。復員した後でその傷跡が今も残っているという話を聞いた。

### 三、終戦

① 中支方面での転戦中、本土防衛の目的で昭和二十一年七月、北朝鮮の新義州へ移動。八月十五日、ここで天皇の詔勅を聞き敗戦を知る。戦友の怒号を耳に共に泣いた。

② 正式の部隊名は第十五航空通信連隊へ通称中支派遣第九八七六部隊、隊員は約七百―八百人だった。

### 四、ソ連軍侵攻

① 終戦後昭和二十年九月二日、ソ連軍は満州から朝鮮に侵攻、新義州に入る。当連隊は無条件で直ちに武装解除され、すぐに帰すという話があった。命は助かったと安堵した。ソ連軍は自動小銃を持った約三百人位の部隊だった。

② 新義州から平壤（ピョンヤン）へ移され、軍の演習場のような所へどこから連れて来られたのか分からないが三万人位集結させられ、貨車で三日位かけて日本海に面した興南<sup>コウナン</sup>へ移った。

③ 貨車生活は大した日数でもなく、最低限の物は与えられ、ソ連兵の口から出る「ダモイ、ダモイ」は毎日聞かされ、興南から帰すのかと皆は思った。

④ 興南で約二カ月位使役をさせられた。主な作業は貨車へ南京袋（豆粕入り）の積み降ろしで、袋を担いで後れた者は尻を蹴られ「ダワイ、ダワイ」と怒鳴られる。中には蹴られて路線上に落とされた人もあり、ソ連将校はこれを見て兵に何か注意していたこともあった。

空腹を満たすため、積み降ろしでこぼれた<sup>こみ</sup>糞を大事に拾った。

### 五、シベリア抑留地での労苦

① 昭和二十年十二月二十五日、興南からまた貨物船に乗せられ、いよいよ「ダモイ」かと思った。

乗船する前、次のような指示があった。

「今から船で移動するが、下痢等体調の悪い者は残ってよい」とのことだった。しかしほとんどの人は早く帰れると思いい、「無理をしても」と残ろうとはしなかった。船は北上し、翌年（二十一年）一月一日ウラジオストックに着いた。また騙された。さらに、ウラジオストックでは五日間も船底生活で、同年一月十五日ソフガワニへ着いた。

②貨物船生活は約三週間、中の環境は最悪であった。

病人で帰りたい余り乗船した人は多数亡くなった。私の戦友稲葉軍曹も亡くなり、ソ連兵の指示により海葬にした。戦友等の涙は止まらなかった。さらに船中で亡くなっていく友を眺め、また用便等で我慢できなくなり、寝ている戦友の頭上を飛び越える途中で漏らす人も少なからずおり、正に生き地獄そのもので、海へ飛び込み死のうと思う人もあった。

## 六、抑留地の生活

①ソフガワニの収容所は流木を材料にした丸太小屋のようで、三段に区切られ、毛布は一人一枚ずつ与えられ、ごろ寝で、暖房はあった。約七百五十人収容されていた。

②食糧は燕麦の黒パンと燕麦の雑炊で、野菜はなく、蛋白質の不足と空腹でネズミを捕って食べた人もあった。

③毎日、朝夕シラミ潰しは大変だった。衣服の縫い目のある所はそろそろと数珠つなぎ、ぞつとしたがらも爪で一匹ずつ潰した。

④ある日、新聞の広告の形式で皆にレポートが配布され、次のような説明があった。

「お前らは日本へ帰っても受け入れられない、食糧に困って死ぬだけだ。ソ連で働かせてもらって生かさせてもらっているんだ。このことはスターリンの慈悲と感謝してほしい」と。

## 七、労役

①ラポーターは伐採で、約半年やった。

隊を組んで、二人用のノコギリとロープを持ち山林に行く。ノルマは個人でなく組単位のようにだった。

作業中大木が倒れ即死した友もあり、皆で木を跳ね退ける。死体は他の運搬組がどこかへ片付け、凍土は固くて掘れないので雪を被せておくだけのようだった。

②約七百人の収容所で毎日四、五人の人が亡くなり、二、三カ月で約二百人が亡くなった。口伝えの話だが、どこへ運ばれるか分からない。伐採で亡くなった処置と同様に、運搬組がソリに積んで毎日運搬し、小山のように積み上げ、雪を被せるか、また降雪で見えなくなるようにしておくだけの様子だった。二百人もの死体をきちんと埋葬できる状況ではなかった。

③「ソフガワニ」はソフガワニ湾に面し、北緯五二、三度の亜寒地帯で、快晴の時は間宮海峡を挟んで樺太の北端が見える。慰霊訪問団に申し込んだが、参加者が少なく中止になった。

④シベリア抑留者の中に朝鮮在留部隊も含まれている。

#### 八、抑留者の統制管理

①健康管理はなく、働けるかどうかは目視検査で、裸にされ前後の肉付きを見る、尻をつねり女医が休ませる人を決める。そしてその女医は、特定の者をどこかに連れ込み自分の慰み者になっているようだった。その特定の人は特別な配給品をもらっていたこともあった。

②私は体調を崩し肺炎を患い、四〇度の高熱で病室に入り一週間うわ言を言っていたようで、その時日本の軍医（愛知県一宮市）がいて、よく面倒を見てもらいました。軍医の話では「ビタミンCの不足ですよ」という診断で医薬用のブドウ糖を与えられ、なお松の葉がよいとのことで毎日その葉を噛んでやっとうよくなった。

病室には九人が入院しており、部屋は八畳位の板間で暖房もなかった。

#### 九、抑留中の生活で極限状態における意識

①衣服は軍隊時代の着の身着のまま、人が亡くなれば下着から靴下、衣服等を奪い合い、死体は裸のままである。誰がどこともなく運んでくれ、また雪を被せられるかと思い、悲壮感が滲み出た。

②悲惨な生活を身をもって体験する。恥も外聞もない、ソ連兵のゴミ箱を漁り、魚の頭を元大学教授と奪い合う。そして、奪い合って得た鮭の頭を一週間嘗めて飢えを凌ぐ。

③この若さで死にたくない、もう一度祖国の土を踏み、父母に会いたい一念で生きる執着以外何もなかった。過酷な生活の中で戦友の死にざまを見て、自分も死の淵に置かれている状況だが、生きて帰ること以外何も考えないよう努力した。

#### 十、帰還

①昭和二十一年十一月中旬、ソフガワニ湾を出航、今度こそ「ダモイ」だろうと元気づく。同二十一年十二月初め、北朝鮮の日本海に面する興南に着く。ここでは約三週間、まあまあ食糧と生活環境だった。十二月二十五日出航、同年十二月二十

七日に日本の佐世保港へ復員した。

ソフガワニ湾出航から佐世保まで約四十日程の復員船では、シベリア抑留で乗せられた貨物船のようなことはなかった。

②シベリア抑留で最初の復員者と思う。抑留生活は捕虜（二十年九月）になってから約十五カ月だったが、約二百人の戦友が亡くなったことは誠に悲しいことだ。なぜ早く帰されたのか理由は分からないが、朝鮮で、しかも終戦後二十五日も過ぎるから捕まったことかとも思われる。

③佐世保から復員列車で安城へ着いたのは昭和二十一年十二月二十九日だった。

当時の住所は愛知県碧海郡安城町である。

#### 十一、帰国後の生活

①昭和二十五年五月、安城の郵便局へ就職。復員後は順調に生活基盤ができた。父母、妹の死と紆余曲折の連続もあったが、苦境に直面した時は、シベリアの労苦に比べれば極楽ではないかと、自らも、そして、家族にも言い聞かせ今日まで来た。

②残された命もあと僅かだが、少しでも歴史を風化させず真実を後世に伝えたいと思った。以上

## シベリア抑留体験談

三重県 森川長成

私は、昭和十六（一九四一）年徴集、現役兵として十七年四月、広島集合にて満州に渡りました。

二十年八月、前任地、下城子より朝満国境凶們に下り、陣地で一発の弾も撃たず終戦を迎えました。

その後、延吉に集結され、二十年九月初め、二百キロ行軍の後シベリア鉄道經由、十月九日アムール河畔のコムソモリスト第五分所に收容されました。シベリア抑留大半の犠牲者はこの十月から翌年の三月頃までの期間がほとんどと思います。忘れもありません。一月十九日、千二百人ほどおりました收容所で一日に十九人亡くなりました。十日で百九十人、一カ月で六百人と悲惨をきわめました。様々な事柄が不幸にも重なり

合った結果ですが、本当に地獄を見る思いでした。抑留の不当性については種々話されておりまして、私は食の真について体験を話します。

三月に入りまして中隊から炊事に行くようになりました。千六百人ほどおりまして、四カ所に分かれて炊事をしておりまして。一番大変なことは、各班による分配の情けない実状であります。十五人程度としますと三十の眼がにらんでいます。パンが厚い、薄い、本当に人間の不信感をもたらす一番の弱点、食べる、この繰り返しです。

ここに一人の男がおりました。同じ連隊の一年上、東京出身の白井伝五郎と申します。「このままでは、若い兵隊や補充兵のオッサンを殺してしまおう。連隊炊事をやろう。手伝え」と、協力を求められました。

四月に入り一時炊事を離れ、左官、大工、料理人等十二人ほどでチームを作り準備を始めました。

まず第一に材料がありません。毎日作業に出ている所を探しました。煉瓦工場、タイヤ工場、ジュラルミン工場等です。主対象にしてパン一本を五十片に切り